

伊豆大島 2025



2025 年 4 月

旅のチカラ研究所 植木圭二

3 月の末、友人たちと伊豆大島に 1 泊旅行をしてきた。島を一周し、三原山に登り、温泉に入り、島の料理を堪能してきた。1 泊でたくさん楽しめる大島の魅力を伝えたくペンをとった。

序章 伊豆大島へ

■旅の始まり

今回の旅は「どこか非日常の場所に連れて行ってよ」と 2 人の友人に頼まれて、私は「非日常ならば島かな、それならば伊豆大島がいいよ」と、これに応える旅をすることになった。

いろいろな経緯から私は伊豆大島（以下、大島）には過去 20 回以上行っており、隅々まで知り尽くしている。それに対して彼らは初めてで、予備知識も無いようだった。それもそのはずで彼らの出身地は関東から遠く、1 人は大分出身の“大（ダイ）さん”、もう 1 人は広島出身の“ヒロさん”で、関東の島事情はあまり詳しくない。

■伊豆諸島

そして今、私たち 3 人は東京竹芝桟橋に集合して、私は彼ら 2 人に伊豆諸島について説明している。

地図を指差しながら「ここからここまでの有人島 9 島が伊豆諸島で、東京都の島で・・・」と説明すると、ヒロさんは「東京都なのになんで伊豆諸島なの？」と質問してくる。私は「昔、これらの島は伊豆の国で、そのため明治維新で静岡県になった。けれども 1878 年（明治 11 年）に東京都に編入され、それでも名前はそのまま伊豆が残った。しかし最近の東京都は、伊豆諸島でなく東京諸島と呼んでいるよ」と説明する。

今度は大さんが「よく伊豆 7 島というのに何で 9 島なの？」と質問をぶつけてくる。私は「それは諸説あって、僕も疑問だったから全島を旅して結論を得たよ」と言い、その答えは旅行記「伊豆諸島の旅 2021」と「伊豆諸島の旅Ⅱ 2022」に書いてある旨を伝えた。

■大島に渡る

私たちはジェット船に乗り込み、大島に向けて出港する。私は「この船は水中翼で海上を滑空するので時速 80km も出るよ」と説明すると、ヒロさんは「NASA（アメリカ航空宇宙局）が開発したからね」と、そんなことまで知っているから凄い。

ジェット船は 1 時間 45 分で大島に到着し、港でレンタカーを借りる。

ナンバープレートが品川ナンバーなので、ヒロさんは感激して写真を撮っている。私も初めてこの島に来た時はどの車も品川ナンバーだとか、警視庁のパトカーがあるなど感激して写真を撮っていたことを思い出す。

第一章 大島一周

■ゴルフ場

大島には大島一周道路と呼ばれている都道 208 号線が走っている。約 50km なので半日もあれば島を一周できる。

私たち 3 人はゴルフ好きでもあり、まずは大島のゴルフ場にやって来る。2 人は「大島にゴルフ場があったの!？」と驚いている。

お客もいないので、私たちはティーグラウンドに立って景色を眺める。普通はプレーヤー以外ティーグラウンドには立つことは許されないが、ここは大島、リゾート地だ。

ヒロさんは「海に向かってのティーショットは最高だね、まさしく非日常だ」と言いながらクラブも持たずに素振りをしている。私は「晴れていれば伊豆半島と富士山が見えるよ」と説明すると、大さんが「本日霞んで見えるのは黄砂だね」と付け足してくれる。



【大島リゾートゴルフクラブの 1 番ホールティーグラウンドから見た景色】

帰りにフロントで料金を聞くと、平日のプレー費は約1万円とのことだ。これを聞いて、大さんが「東京都のゴルフ場がそんなに安いの・・・今度はゴルフに来よう！」と元気がいい。

■野田浜バディーズ・ベル

大島はダイビングでも有名で、ダイビングスポットの野田浜には「バディーズ・ベル」という鐘がある。事故で亡くなったダイバーへの追悼の鐘だという。

ダイビングは危険と隣り合わせのスポーツなので1人では潜らずに必ずパートナーと潜る。そのパートナーのことをバディ（Buddy）と呼ぶからこの鐘の名前になったようだ。

ヒロさんは「伊豆大島には何でもあるね」と感心している。



【バディーズ・ベル】

■サンセットパームライン

野田浜から南に向かって5kmほど綺麗な海岸があって舗装された道が続いている。島の西側なので夕日を見て走ることができるから、道は「サンセットパームライン」と名付けられていて、自動車が走る道路と人間や自転車用の遊歩道が並走している。

私は「この道は朝のウォーキングにぴったりで、西側なので日の出は見えないけれども、伊豆半島と富士山が見えるよ」と伝えると、大さんは「次に来るときはジョキングだね」と元気がいい。大さんは一昨年ホノルルマラソンを走っている中年ランナーだ。



【サンセットパームライン 中央に富士山、左に伊豆半島 (2019年撮影)】

■黒い砂浜

「弘法浜」という海水浴場に立ち寄る。ヒロさんが「これ何！真っ黒な砂浜だね」と言って砂の色に驚いている。

大島は火山活動で出来上がった島なので、海岸の砂も溶岩が固まった岩と同じで黒い。私は黒い砂浜に慣れてしまっているが、初めて来た人は黒い砂浜の海水浴場に驚くのは当たり前かもしれない。



【弘法浜の黒い砂浜】

■大島町メモリアル公園

大島は大昔から火山噴火を繰り返しており、多くの被害を出していた。しかし 2013 年には火山噴火ではなく台風の大雨により大規模な土砂崩れが発生し、39 人もの犠牲者を出した。今でもその爪痕が山肌に克明に残っている。

その時、土砂で家々が流された跡地に「大島町メモリアル公園」が造られ、その慰霊碑がある。私たちは慰霊碑の前で手を合わせ、大さんが「黙とうー」と言って目を閉じる。



【メモリアル公園から見た土砂崩れの跡の山肌】

■バウムクーヘン

大島は火山の島なので、太古の昔から噴火を繰り返して噴出物が積み重なっている。その証とも言えるものが島の南西部の海岸線にある「地層大切断面」で、地元では“バウムクーヘン”の愛称で親しまれている。

ヒロさんは「これ、凄いね！確かにバウムクーヘンだ」、大さんも「美味そうだよ」と言って、写真を撮りまくっている。

バウムクーヘンは高さ約 30m で約 800m 続いている。1953 年に大島一周道路建設中に出てきたものだと言明看板に書かれている。

私は「この断面は放っておくと草が生えてくるので定期的に散髪を兼ねて岩を削っているよ」と伝え、大さんは「そうすると、いずれ無くなるね」と言ってくる。私は「その前に我々3人が亡くなっているよ」と答え、一同大笑いになる。

このバウムクーヘンはこの世に出現して約 70 年、それはちょうど私たちと同じくらいの年齢だが、実に頼もしく太平洋に対峙して威風堂々とそびえ立っている。それは大島が太平洋に向かって、「どんなもんだい！」と胸を張っているようにも見える。そして私はいつもその雄姿を見て元気をもらっている。



【地層大切断面】

■波浮の港

「波浮の港」を訪れる。この港は 838 年の噴火によってできた火口を利用した天然の良港で、島の南端つまり太平洋に突き出ているので遠洋漁業の基地として、かつては多くの漁船が出入りしていた。

838 年といえば平安時代初期、どうして正確に年号が分かるのか不思議だが、地層と古文書を突き合わせたのだろう。

火山の噴火の歴史を知るのに便利なツールとして気象庁の HP があり、有史以来の全国の火山の噴火記録が詳しく載っている。そこを覗いてみると大島は 680 年から噴火の記録があり、現在まで 59 回噴火している。先ほど見てきたバウムクーヘン是有史以前で、それも遥か前のことになるから、一体どれほどの噴火があったのだろうか。



【波浮の港】

波浮の港は都はるみの大ヒット曲「アンコ椿は恋の花」で歌われた港で、港を臨む高台にその歌碑が建っている。

歌碑を見ながら、大さんは「この歌は良く知っているよ、中学生の頃だったかな」と言うと、ヒロさんが「確か東京オリンピックの 1964 年だったかな」と付け足す。私は「これで歳が分かるね」と言いながら 2 人の顔を見ると、2 人とも苦笑いをしている。

そういえば以前もこの場所に 20 代の若者を連れてきたことがあるが、そもそも都はるみを知らないので、説明に苦慮したことを思い出す。

■伊豆の踊子

かつて波浮の港は漁師たちで賑わっていた。その漁師たちが泊まり、宴会をしていた「旧港屋旅館」がある。現在はその役目を終えて観光客に無料開放されている。明治時代に建てられた木造 3 階建ての古い建屋に入ると、映画化された「伊豆の踊子」の歴代ヒロインたちの写真が飾っている。踊子に扮した美空ひばり、吉永小百合、山口百恵などの懐かしい写真だ。

大さんが「伊豆の踊子が、何で大島なの？」と聞いてくる。私は「川端康成の『伊豆の踊子』の中で、主人公の青年が伊豆半島を旅している時に会った踊子たちは、実は波浮の港を拠点にしていた旅芸人一座で、伊豆半島にも行っていたからだよ」と答える。

川端康成は旧制一高在学中の 1918 年（大正 7 年）に伊豆半島に一人旅をしており、その時の体験から伊豆の踊子を書いた。つまり旅によって文学が生まれ、ノーベル賞までもらった。

私も昨年は本を出版し、最近では日本旅行作家協会会員にもなったから、何か良いことがあるかもしれないと勝手に思い始める。

踊り子たちが、芸で客をもてなした当時の様子を再現する人形がある。漁師たちが陸（おか）に上がって束の間の宴会を楽しみ、踊り子たちはそれに応えようとしている姿が何とも切ない気持ちになる。

そんな人形たちを大さんがじっと見ている。漁師へのねぎらいか、それとも踊子との恋に憧れているのか。



【旧港屋旅館とその中で行われた宴会の様子】

■網元の家

旧港屋旅館からさらに登り階段があつて、登り切ったところに「旧甚の丸邸（きゅうじんのまるてい）」という明治時代に建築された網元の家がある。ここも現在使われておらず、無料開放されている。

大谷石、海鼠（なまこ）壁をはじめ、梁や柱などに銘木を用いるなど、当時の豪勢な暮らしぶりがかうかがえる。

実は私は旧甚の丸邸に初めて訪れる。旧港屋旅館からかなりの階段を登るので、今まで一緒に来た人たちは「疲れるから遠慮しておくよ」という言葉がいつも返ってきたが、大さんもヒロさんも足腰が丈夫で、そして好奇心旺盛なのが幸いした。

旅にはもちろんそれなりの体力が必要だが、それにもまして好奇心が必要になる。それらがあるからこそ非日常を味わえて感動が生まれる。



【旧甚の丸邸の外観と内部】

■筆島

波浮の港から島の東海岸を少し北上すると、筆を立てたような奇岩「筆島」がある。高さ約 30m ということだが、展望台から 500m くらい離れているからあまり迫力は感じない。



【筆島】

似たような島は日本各地にある。島根県隠岐諸島の西の島にも高さ 20m のローソク岩があり、北海道余市の沖にも高さ 43m のローソク岩がある。この 2 つがローソク岩と呼ばれる理由は夕日を浴びてローソクの先に火がついてように見えるからだが、筆島は島の西側の断崖の近くなので、夕日があたることがないからそれは望めない。だから筆なのか。

それにしてもパンフレットに載っていたローソク岩の写真は実に見事だった。それを期待して行ったが、本物はそうでもなく落胆した。実はそんな体験は結構多くある。

私はそのようなことを「期待と落胆」と呼んでいる。

美しい写真や映像の多くはプロが撮ったもので、プロは場所を選んで撮影チャンスを待って最高の機器と技術で撮るから感動的な写真になるのは当たり前で、それに対して私たち旅行者は晴れの日も雨の日もあってそのように感動するシーンに出会うことは少ない。

逆に現地に行って、予想や期待を超えた時に感動が生まれる。特に予期せぬこと、つまり偶然遭遇した感動ほど増幅される。それが「偶然と感動」だ。そんな「偶然と感動」は非日常になればなるほどを遭遇することが多くなる。

旅は「期待と落胆」と「偶然と感動」が表裏一体になって進行していく。だから面白い。

プロが撮った隠岐の島のローソク岩の写真と私が撮った写真を載せておこう。



【隠岐の島のローソク岩 左は私が撮った写真、右は隠岐の島町観光協会の HP より】

■都立公園

大島一周道路沿いにある都立「大島公園」にやってくる。この公園は植物園と動物園を併設しており、手入れがとても行き届いている。

植物園には椿園がある。展示用に植えられた椿は約 1000 種 3200 本と、もともと自生しているヤブツバキ約 5000 本があるから、国内最大規模のスケールになっている。

ヒロさんは「さすがに東京都だ」と言い、大さんは「東京都は金持ちだからね」と言っている。私も含め 3 人とも神奈川県民なので、時々それを感じる。

椿の開花時期は 11 月頃から 4 月頃までで、そのピークに合わせて毎年椿祭りを開催している。今年の椿祭りは 2 月 2 日～3 月 16 日で、残念ながら来るのが少し遅かったようだ。

それでも椿の種類によっては開花真っ盛りで、大さんは「この花、デカイ！」感激している。



【都立大島の椿園】

■泉津の切通し

大島一周道路から少し脇に入ると「泉津の切通し」がある。岩を切り砕いた石段の道があって、両側から巨木の太い根が生えている。

数年前に大島を舞台にした深夜ドラマで、この切通しが映されて SNS で広まって有名になった。それまでは島民でも知る人が少なく、観光名所ではなかったらしい。



【泉津の切通し】

最初に写真で見た泉津の切通しは大きくて神秘的なものだったが、実際に本物を見たら意外に小さかった。これも「期待と落胆」だろう。

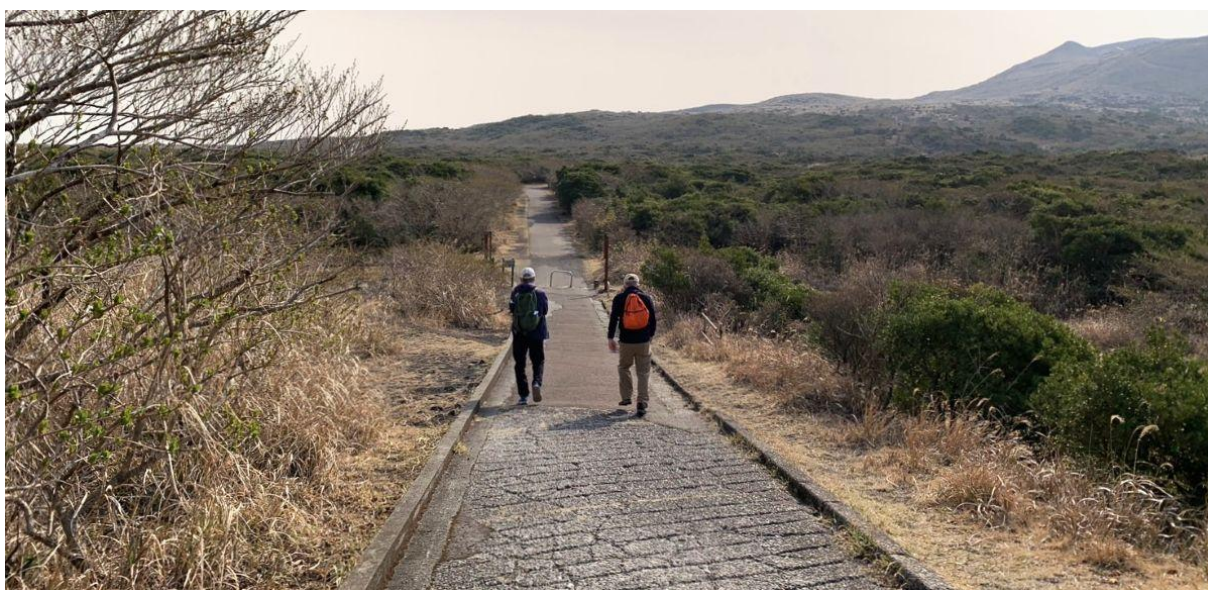
第二章 三原山登山

■三原山登山

大島と言えば三原山、その山体そのものが大島と言っても過言ではない。三原山は二重カルデラ火山で、外輪山の一角に展望台があり、登山口にもなっている。

登山口の標高は約 555m、登山する場合はそこから一度カルデラの底まで 20m くらい下り、標高 758m の最高地点があるすり鉢状の火口を目指して登る。

コースレートは登山口から頂上にある三原神社まで 40 分、火口一周のお鉢回りが 50 分、戻ってくるのに 30 分なので、休憩を取らなければ約 2 時間で行って来られる。



【登山口からカルデラの底に向かって歩き始める 右上が三原山】

カルデラの中は比較的平坦で、低い木々と溶岩が固まった岩が多くある。地面は火山岩が砕けた軽石のような黒い石や砂でできているが、山頂までの道は舗装道路になっているから、登山というほどのものではなく、ウォーキングと行ってもいいだろう。

そんな道を頂上目指して歩いていると、心地よい山風が吹き抜ける。いや海が近いので海風かもしれない。よく考えると、ここは海に浮かぶ山なので、どちらも正解だろう。

登山好きのヒロさんは「今回の旅で三原山登山を楽しみにしていたので、期待通りだよ」と言っている。中年ランナーの大さんはスキップしながら登山を楽しんでいる。

そんな私たちの横を火山噴火の調査をする 4WD 車がゆっくりと追い抜いていく。私たちは「ご苦労様」と声を掛けると、車の中から「お気をつけて」と返ってくる。

■三原山山頂

頂上にある「三原神社」に到着する。この神社は火口付近にありながら 1986 年の噴火で溶岩流が神社を避けていった。その強運を求めて登山してくる参拝客もいるという。

私たちもその強運にあやかりたく、大さんは「賽銭を多めに入れよう」と言って参拝している。

神社の近くにゴジラ岩と呼ばれるゴジラの姿に似た奇岩がある。晴れていればそのゴジラ岩の向こうに富士山が見える絶好のフォトスポットになっているが、残念ながら本日は黄砂で全く見えない。



【ゴジラ岩】

■お鉢回り

ゴジラ岩からお鉢回りが始まる。標高 700m 前後のお鉢を一周すると近海の半島や島が全て見えるはずだが、今日は黄砂で視界が悪く一番近い利島がぼんやり見えるだけだ。

お鉢回りをしていると火口が大きく見えるポイントがある。火口は直径約 350m、深さ約 200m もある。火口内とその周囲には蒸気が出ている場所もあり、大島の鼓動が聞こえてくるようだ。



【三原山火口】

1984 年公開の映画「ゴジラ」で、噴火しているこの火口にゴジラが落ちて終わる。たとえゴジラでも噴火中の火口では生きていないと思うが、ゴジラは不死身でその後も何度も復活する。

それにしてもゴジラはこれだけ日本映画に貢献しているのに、なぜ日本アカデミー賞を受賞できないのか。不思議に思うのは私だけでないだろう。

お鉢回りの道は今までの舗装道路と打って変わって火山岩と砂の道で、そこに車輪の跡が見える。火口周辺は観測機器が多く設置されているから、きっとあの 4WD 車の轍だろう。

昔はとてもここに車で登ることなど不可能だと思ったが、道幅が広がって 4WD 車の性能が向上したのだろう。



【758m の山頂標識と 4WD 車の轍】

■裏砂漠

火口の反対側のカルデラは黒い砂地になっており、「裏砂漠」と呼ばれている。

そしてこの大島の裏砂漠こそが国土地理院が日本で唯一砂漠と認めている場所で、ここ以外に砂漠と称するところは日本には存在しない。ちなみに鳥取砂丘はあくまでも砂丘で、砂漠ではない。こんなことを書くと申し訳ないが、実際に鳥取に行って感じることは、カメラマンは実に上手く撮影しているということだ。

昔ここを訪れた時にオフロードバイクや 4WD 車が“砂遊び”をしているのを見たことがある。その時は何と酔狂な事と思っていたが、こんな広大な砂遊びは日本の他の場所ではできない。



【裏砂漠 赤丸の部分にバイクが見える (2013 年撮影)】

第三章 温泉と料理

■立ち寄り湯

三原山登山の後、ヒロさんも大さんも「登山の後は温泉に入りたい」と言っている。

そこで私は立ち寄り湯ができる「愛らんどセンター御神火温泉」に車をつける。この施設は1986年の三原山噴火後に湧き出た温泉を利用した町営の温泉施設で、大浴場にはサウナ、打たせ湯、ジャグジーがあつて、さらにそれ以外に25mの温泉プールやレストランも併設されている。

入場料は710円で、1年間使える利用パス36500円もある。島民の多くはこれを使って毎日温泉三昧を楽しんでいると2人に伝えると、大さんは「1回100円かぁ〜」と羨ましそうに言っている。

私たちは温泉に浸かり、三原山登山の汗を流す。ヒロさんは「極楽だぁ〜やっぱ温泉は最高!」と言っている。

■絶景露天風呂

今宵は「大島温泉ホテル」に泊まる。このホテルはカルデラの外輪山の一角に建っており、ホテルから目の前にそびえる三原山を眺めることができる。それは露天風呂からも見えるので、三原山を臨む絶景露天風呂がこのホテルの売りになっている。

露天風呂に浸かると三原山が目の前に大きく広がっており、解放感抜群の入浴ができる。それは実に素晴らしい。

温泉好きの人が、お勧めの絶景露天風呂を私に聞いてくることがあるが、私はこの露天風呂を紹介することが多い。

山男のヒロさんは「この露天風呂、最高!」と言い、中年ランナーの大さんは「この露天風呂は人にあまり教えたくないね」と言っている。2人ともものぼせ上がるまで絶景露天風呂に浸かっていた。



【大島温泉ホテルの露天風呂から三原山を臨む（2013年訪問時に撮影）】

■大島温泉ホテルの料理

この宿では露天風呂以外に、名物料理「椿油のフォンデュ」がお勧めだ。フォンデュというとハイカラな感じがするが、簡単に言えば串カツで、それもパン粉を使っていないから自分で揚げる串刺し天ぷらとでもいうものになる。

具材は大島近海の海の幸を中心に大島産の野菜、そして大島で多く採れる明日葉もある。明日葉は今日採っても明日生えてくるから明日葉と言うが、その生命力も含めて美味い。

ヒロさんが「この油は本当に椿油なの？」と聞いてくる。私は「全部が椿油だとえらく高いものになってしまうから、おそらく普通の天ぷら油に椿油を少量加えているだけかも」と応える。この素朴な質問はここに一緒に泊まった人のほとんどが聞いてくるが、どのくらい入っているかは企業秘密だろう。

今回私たちは特別室に泊まっており、料理も特別になっている。そのため椿油のフォンデュだけでなく、1人ずつに豪華な船盛の刺身や尾頭付き金目鯛一匹の煮付けも付いている。

金目鯛は伊豆の下田港が水揚げ日本一で、すぐ近くのここ大島でも多く獲れるのだろう。

金目鯛の煮付けはもちろん美味いが、刺身は島ならではの“島醤油”で食べるからピリ辛で実に美味い。その島醤油とは、醤油に青唐辛子を漬け込んだもので、伊豆諸島の土産物として重宝されている。

伊豆諸島はかつて静岡県だった。静岡と言えばワサビが有名だが、水が貴重な島では水にこだわるワサビは栽培できない。そこで青唐辛子をワサビ代わりに使う食文化が生まれた。

この島醤油にヒロさんがはまった。彼は「美味しい、美味しい」と言いながら、それこそ感動の涙を浮かべながら、船盛いっぱい刺身をペロリと食べてしまった。

ヒロさんは「これ土産に買っていく！」と言って、島醤油の容器のラベルをしげしげと見ている。



【大島温泉ホテルの夕食 船盛と金目鯛は1人前、椿油のフォンデュは2人前】

■大島の名物料理

翌日の昼、レンタカーを返すと帰りの船まで時間がある。軽く一杯飲み、そして昼食を食べるために港近くの食事処に入る。

メニューを見ていたら、何と「クサヤ」がある。私は迷うことなくクサヤを注文する。

クサヤは新鮮な魚を開いて水で洗い、クサヤ液と呼ばれる魚醬に漬け込んだもので、酒の肴として重宝されている。クサヤ液には防腐抗菌作用もあり長期保存が可能だが、何ととっても強烈な臭いで癖がある。そのため好き嫌いがこんなに分かれる肴はないだろう。

クサヤ作りが始まった頃、それはたぶん江戸時代のことだが、当初は魚を塩漬けにしていた。しかし島では漬け込む塩が貴重なので、塩漬けした液を捨てずに塩を継ぎ足して繰り返し使うようになった。その結果、その液に魚の味が加わって独特の風味になってクサヤ液になっていった。

幸いにして 2 人ともクサヤが好きになったようで、特に大さんは完全にはまった。そして彼もまた「これ土産に買っていく！」と言っている。

クサヤだけでは腹がいっぱいにならないので、大島名物の「ベッコウ寿司」も食べる。ベッコウ寿司とは白身魚を島醤油に漬けてにぎったもので、その色がベッコウに似ているからそう呼ばれている。当然のようにピリ辛で美味い。



【クサヤ】



【ベッコウ寿司】

実はこのベッコウ寿司と同じようなものを、1 年前に沖縄本島から東へ 360km 離れた太平洋の孤島の南大東島と北大東島に行った時に食べた。それは「大東寿司」と呼ばれるもので白身の地魚を甘口の醤油に浸けて握った寿司でピリ辛ではなく甘口だったが、ベッコウ寿司と見た目は全く同じに見える。

実は南・北大東島は有史以来、その存在さえも知られていなかった。しかしその存在が知られて、1900 年に八丈島から開拓のために島民が移住した。同時に伊豆諸島の食文化も持ち込んだ。

甘口の理由は南・北大東島はサトウキビが主力産業だからか、あるいは青唐辛子がとれないからだろう。

こんなことの繰り返しで島の文化は出来上がっていく。だから島の旅は面白い。

終章 旅を振り返る

■安く島に行く

私は大島はじめ伊豆諸島に頻繁に行くので、船を運航している東海汽船株式会社の株主になっている。

その理由は株主優待制度で、35%引きの運賃で船に乗ることができる。さらに東海汽船が経営している大島温泉ホテルには半額で泊まることができるからで、今回その恩恵を活かして特別室に泊まった。

その他にも各種割引サービスがあるから株主優待を利用しない手はないだろう。

株主にならずとも、金券ショップで株主優待券を買うという方法もある。

東京都では東京諸島への旅行客誘致のため、プレミアム付き宿泊旅行商品券「しまぼ通貨」を販売している。これを利用すると宿、レンタカー、買い物などが30%割引になる。残念ながら今回は売り切れてしまって利用できなかった。

東京諸島以外にも他の都道府県の島でも、行政や船会社による割引サービスがあることも多いので、事前に調べていくことをお勧めしたい。

■温泉評価委員会

私は温泉宿を評価する温泉評価委員会、通称「おひょい」を立ち上げている。それは温泉宿に泊まった時に組織される勝手気ままな委員会で、委員は同行した人になる。あれこれ話し合っ

て委員会として評価値を算出する。ただし今回は私1人の意見で決定した。

評価項目は泉質、風呂、料理、コスパ、サービス、建物・部屋、立地環境の7項目で、平均値を総合点としている。温泉は泉質と風呂で分けており、立地環境はかつて秘湯度という項目だったが、都市型の温泉もあるのでロケーションを評価するようにした。

評価基準は5段階としてその定義は、5は驚き感動、4は普通に良い、3は可もなく不可もない、2は普通に悪い、そして1は失望落胆としている。

「大島温泉ホテル」は、泉質4、風呂5、料理4、コスパ5、サービス3、建物・部屋3、立地環境5、総合点4.14になった。株主優待の50%割引を含めてコスパを評価した。

湧出温度は84.2℃、pH 6.9、泉質は低張性高温単純泉だった。

■旅の記録

実施は2025年3月24日（月）～3月25日（火）の1泊2日で、その行程を示す。

- ・1日目 8:30 東京竹芝桟橋（ジェット船）→10:15 伊豆大島岡田港、レンタカーを借りて島内探訪開始、「伊豆大島リゾートゴルフクラブ」、「ぷらっとハウス」、「野田浜バディーズ・ベル」、「サンセットパームライン」を見物、スーパーで昼食弁当購入、「大島町メモリアル公園」で慰霊、

「三原山外輪山展望台（三原山頂口）」で昼食、「地層大切断面」、「波浮の港」、
「旧みなとや旅館」、「旧甚の丸邸」、「波浮港見晴台」、「筆島展望台」、
「大島公園（椿園）」、「泉津の切通し」を見物、スーパーで買い物して、
15:30「大島温泉ホテル」チェックイン

- ・2日目 8:20 宿を出て、「三原山外輪山展望台（三原山頂口）」から三原山登山、お鉢回り、
下山して「愛らんどセンター御神火温泉」で立ち寄り入浴、
岡田港でレンタカー返却後に食事処「一峰」で昼食、
15:30 伊豆大島岡田港（ジェット船）→17:15 東京竹芝桟橋着、解散

費用は1人当たり約33000円、詳細を以下に記す。

交通費

東海汽船	12400円（往復、株主優待35%引き）
レンタカー36時間	3167円（1台9500円）
ガソリン代	599円（1台1797円）

宿泊費

大島温泉ホテル	10633円（株主優待50%引き、夕食時アルコール含む）
---------	------------------------------

その他

スーパー買い物（昼食）	625円（昼食の弁当など、1人分）
スーパー買い物（酒など）	1834円（宿に持ち込んだアルコール類、つまみ、1人分）
御神火温泉入場料	710円（69歳まで710円、70歳以上は300円）
打ち上げ	3500円（1人当たり）